

はじめに ————— 3
作品について ————— 7
凡 例 ————— 8

Somnium Scīpiōnis ————— 9

Somnium Scīpiōnis スキューピオーの夢〈語句と文法解説〉————— 20

(9) …… 20	(10) …… 37
(11) …… 54	(12) …… 69
(13) …… 85	(14) …… 95
(15) …… 105	(16) …… 126
(17) …… 145	(18) …… 171
(19) …… 192	(20) …… 202
(21) …… 215	(22) …… 229
(23) …… 238	(24) …… 246
(25) …… 262	(26) …… 276
(27) …… 291	(28) …… 311
(29) …… 320	

「スキューピオーの夢」(全文訳) ————— 332

「スキューピオーの夢」(現代語訳) ————— 342

単語集 ————— 354

作品について

「スキピオの夢」は、キケロー（前106～43）の『国家について』（前51）の最終巻、すなわち第6巻の9節～29節に当たる一つのまとまったエピソードです。19世紀の初めまで他の巻の写本がすべて失われたと信じられていたのに対し、このエピソードだけが奇跡的に消失の危機を免れ、連続と読み継がれてきました。

内容を一言で述べると、ローマの英雄スキピオが夢の中で義理の祖父大アフリカーヌスに出会い、真の誉れの何たるか、魂の不滅や天における永遠の生とはどのようなものかについて教えを受けるというものです。舞台は壮大な宇宙であり、スキピオはかつて聞いたことのない甘美な音楽を耳にしながら、祖父の指し示す小さい地球を黙って見つめます。地上での名誉のはかなさを強調しつつ、不滅の魂の力を人間としての最善の仕事のために発揮せよ、という大アフリカーヌスの言葉は、そのまま現代を生きる私たちの胸に届くでしょう。

著者のキケローは共和制末期のローマの政治家にして哲学者でした。その流麗で力強い文体はラテン語散文を完成の域にまで高めたと評されます。多作の人でしたが、「スキピオの夢」はキケローの数ある作品の中でも分量的に短く、用いられる語彙と文法のレベルも平易な部類に属します。初めてキケローの思想にふれたい人、また、ラテン語の原典講読に初めて挑戦する人にとって最適な作品と言えるでしょう。